

漢法苞徳塾資料	No. 067
区分	治療・配穴
タイトル	続・経穴の五行配穴論（橋本素岳論）
著者	八木素萌
作成日	（東洋鍼灸・専修科）

経穴の五行配当は、これを意識的に活用することができれば、治療的に経絡経穴を運用する上で、臨床効果を確実に出すことができるようにするものである。

橋本素岳師の『経穴の五行配当』のテキストは、『経絡治療』の経絡経穴の運用の方式を懇切に記述している。これは「経絡治療」創設期以来の治療方式の骨格を説明しているものであるが、このような方式について、現代中国では「五行配穴法」と命名して基本的な配穴方式の一つに挙げて記述し教育している。

臨床に際して効果的に「経絡治療の配穴方式」＝「五行配穴方式」を運用する為に、若干の追加的な説明をして置きたい。

★「脈証によって、陰陽虚実臓腑を決定し治穴を選択し補瀉する」のであるが、脈診法には別紙のように九通りがあり、我が国の湯液治療家は主に「傷寒脈法」を用い、鍼灸家は主に『経絡治療の六部定位脈法』を用いている（但し、「鍼灸における〈証〉の問題について」のテーマによる最近五年間の日本経絡学会の討論は、脈状診と併用する治療家が増えてきている）。しかし、中国の鍼灸家は、日本の鍼灸家のように、脈診はあまり重視していない。

「六部定位脈」法であろうと「脈口左右での人迎・氣口脈」法であろうと「奇経脈」法であろうと、脈診による判断と治法の選択との関係の問題は、臨床家にとって重大な問題である。東洋医学史においては「脈に従うべきか？証によるべきか？」は随分議論されてきた問題である。

★「脈か証か」の問題の議論の中で、『診家正眼』（明・李中梓）は〈傷寒は脈に従い、雑病は証に従う〉ことを論じている。その直後に『症因脈治』（明・秦景明）は「先ず症を弁じ続いてその因を明らかにして再び脈を切って症により因により脈によりて治を用いる」ことを自序しているし、後に清の康熙の45年に同書を纂校した秦之禎は「症は内外傷に分ち因は内外因に分け脈に虚実を分かち治には経絡を分かちて症に対する薬を用いた」と序文に書いて、さらに「凡例」で「治病は先ず12経絡を分別し何経かを灼見して主病用薬す…」と述べ、また〈症脈が相応する者は脈に依って方を用い、症状は明らかだが脈象は糊模で脈に依って立方しにくいので症に随って施治する者があり、治法の中には表裏の両つの条理に余る時には症に従ったり脈に従ったりする…〉とも述べている。

★清代医学の成果を引き継いで、近代中国医学は、毛沢東の新中国になって後に、装いを代え始めて『現代中国学』とも言うべき性質のものになって行く。この『現代中医学』に、理論的な準備をもたらした代表的な医学者にして著名な臨床家は、秦伯未（『中医入門学』あり）と銭楽天（『中医捷徑』あり）があり、また、すぐ続いて任応秋（『黄帝内経類析』ほかあり）他がいる。

鍼灸家では『現代中医鍼灸』学術の初期に、極めて重要な土台をもたらした基礎的貢献をしたのが、承淡安（若い時に日本に学び経絡治療創初期の重要な指導者とも交わり、日本に残されていた多くの古典的な鍼灸医学書をも中国に紹介した。また『鍼灸真髓』〈沢田〉・『誰にもわかる経絡治療講話』〈本間〉・『経絡の研究』〈丸山ほか〉などを中国語に翻訳して紹介した）などである。

これらの著作の内日本語訳が出されている『中医入門』〈秦伯未〉を見ると「…四診与症候也須密接結合 前人有捨脈從症 也有捨症從脈 作為治療的緊急措施 實際上這種措施 是根拠四診的結果 通盤考慮後所作出的決定 四診中又以切脈和望舌最重要…」(口語意識 〈訳一八木〉 診察と症候とはまた緊密に関連すべきものである、先人は治療する際に脈診法結果では無く症候からの判断に依拠する場合もあれば また反対に症候に基づく判断に依拠するのでは無く脈診の結果に従って処置しているのもあって 緊急的な治療措置を行なっている これらの処置は四診察を行なって診察の結果を全体的に考慮した上で治療を決定しているのである。四診の中では脈診と舌診が重要である…。) のように記述している。この後になると秦伯未のように脈診を重視しているようには見えない。

★現在の脈診法と脈診の位置に関する中国の状態

先述の秦伯未のような考えが基本になっている。脈診の方法としては『症因脈治』(明・秦景明) に記述されているやり方が主流であり、詳細な脈状診であり部位も勘案して判断しようとしている。その内容を、も少し見てみると、つまり「脈証」の「脈」は主として脈状診であり、「証」は主として「病証論」による症候の解析による判断である。

日本の「証」と中国の「現代中医学」の「証」とは、概念内容にかなり大きな隔たりが見られるものである。日本鍼灸による判断の優れている点は触診（腹診・切経などを）を大切にしていることである。

★鍼灸治療の眼目

7 2 難 …調氣之方、必在陰陽者、知其内外表裏、隨其陰陽而調之、故曰調氣之方、必在陰陽。

7 6 難 …当補之時、從衛取氣、当瀉之時、從榮置氣、其陽氣不足、陰氣有余、当先補其陽、而后瀉其陰、陰氣不足、陽氣有余、当先補其陰、而后瀉其陽、榮衛通行、此其要也。

8 1 難 …経言無実々虚々、損不足而益有余、是寸口脈耶、将病自有虚実耶、其損益奈何、然、是病、非謂寸口脈也、謂病自有虚実也。仮令肝実而肺虚、肝者木也、肺者金也、金木当更相平、当知金平木、仮令肺実而肝虚、微少氣、用鍼不補其肝、而反重実其肺、故曰実々虚々、損不足而益有余、此者中工之所害也。

## ★五俞穴の性質と主治

- 3 8 難 …所以府有六者、謂三焦也、有原氣之別焉、主持諸氣、有名而無形、其經屬手少陽、此外府也…
- 6 2 難 …臟井榮有五、腑独有六者、何謂也、然、腑者陽也、三焦行于諸陽、故置一俞、名曰原、腑有六者、亦與三焦共一氣也。
- 6 6 難 …〈十二經の全ての原穴名を挙げた後に〉…十二經皆以俞為原者何也、然、五臟俞者、三焦之所行、氣之所留之也、三焦所行之俞為原者何也、然、臍下腎間動氣者、人之生命也、十二經之根本也、故名曰原、三焦者、原氣之別使也、主通行三氣、經歷于五臟六腑、原者、三焦之尊号也、故所止輒為原、五臟六腑之有病者、皆取其原也。
- 4 0 難 …經言肝主色、心主臭、脾主味、肺主声、腎主液、鼻者肺之候、而反知香臭、耳者腎之候、而反聞声、其意何也、然、肺者西方金也、金生于巳、巳者南方火也、火者心、心主臭、故令鼻知香臭、腎者北方水也、水生于申、申者西方金、金者肺、肺主声、故令耳聞声。
- 4 7 難 …人面独能耐寒者、何也、然、人頭者、諸陽之会也、諸陰脈皆至頸胸中而環、独諸陽脈皆上至頭耳、故令面耐寒也。
- 6 3 難 …十變言、五臟六腑榮合、皆以井為始者、何也、然、井者、東方春也、万物之始生…  
…当生之物、莫不以春而生、故歲数始于春、日数始于甲、故以井為始也。
- 6 4 難 …陰井木、陽井金、陰榮火、陽榮水、陰俞土、陽俞木、陰經金、陽經火、陰合水、陽合土、陰陽皆不同、其意何也、然、是剛柔之事也、陰井乙木、陽井庚金、陽井庚、庚者、乙之剛也、陰井乙、乙者、庚之柔也、乙為木、故言陰井木也、庚為金、故言陽井金也、余皆倣此。
- 6 5 難 …所出為井、井者、東方春也、万物之始生、故言所出為井也、所入為合、合者、北方冬也、陽氣入藏、故言所入為合也。
- 6 7 難 …陰病行陽、陽病行陰、故令募在陰、俞在陽。
- 4 5 難 …經言八会者、何也、然、腑会太倉、臟会季脇、筋会陽陵泉、髓会絶骨、血会膈俞、骨会大杼、脈会太淵、氣会三焦外一筋直兩乳内也、熱病在内者、取其会之氣穴也。

## ★配穴原理

- 6 8 難 …五臟六腑、皆有井榮俞經合、皆何所主、然、經言所出為井、所流為榮、所注為俞、所行為經、所入為合。井主心下滿、榮主身熱、俞主体重節痛、經主喘咳寒熱、合主逆氣而泄、此五臟六腑井榮俞經合所主病也。

- 7 4 難 …経言、春刺井、夏刺榮、季夏刺兪、秋刺經、冬刺合者、何謂也、然、春刺井者、邪在肝、夏刺榮者、邪在心、季夏刺兪者、邪在脾、秋刺經者、邪在肺、冬刺合者、邪在腎。其肝心脾肺腎而繫于春夏秋冬者、何也、然、五臟一病輒有五色、假令肝病、色青者肝也、臊臭者肝也、喜酸者肝也、喜呼者肝也、喜泣者肝也、其病衆多、不可尽言也、四時有数、而并繫于春夏秋冬者也、鍼之要妙、在于秋毫者也。
- 7 5 難 …経言東方実、西方虚、瀉南方、補北方、何謂也、然、金木水火土、当更相平、東方木也、西方金也、木欲実、金当平之、火欲実、水当平之、土欲実、木当平之、金欲実、火当平之、水欲実、土当平之。東方肝也、則知肝実、西方肺也、則知肺虚、瀉南方火、補北方水、南方火、火者、木之子也、北方水、水者、木之母也、水勝火、子能令母実、母能令子虚、故瀉火補水、欲令金不得平木也、経曰、不能治其虚、何問其余此之謂也。
- 7 0 難 …春夏者、陽氣在上、人氣亦在上、故当浅取之、秋冬者、陽氣在下、人氣亦在下、故当深取之… …春夏温、必致一陰者、初下鍼、沈之至腎肝之部、得氣引持之陰也、秋冬寒、必致一陽者、初内鍼、浅而浮之至心肺之部、得氣推内之陽也、是謂春夏必致一陰、秋冬必致一陽。

★迎随補瀉とは

- 6 9 難 …虚者補其母、実者瀉其子、当先補之、然后瀉之。不実不虚以経取之者、是正経自生病、不中他邪也…
- 7 2 難 …所謂迎随者、知荣衛之流行、経脈之往来也、随其逆順而取之、故曰迎随、調氣之方、必在陰陽者、知其内外表裏、随其陰陽而調之
- 7 9 難 …迎而奪之者、瀉其子也、随而濟之者、補其母也。假令心病 瀉手心主兪、是謂迎而奪之者也、補手心主井、是謂随而濟之者也。